

# らしっく

自分らしく、粋なくらし

まちづくり・生涯学習情報誌

2012.3 Vol.32 | 三色堇

さんしきすみれ／英名のパンジーは花がチンパンジーの顔に似ているところから出たという珍説がありますが、確かにこの花をじっと見つめていると、猿が笑っているようにも見えます。pansyはpansee(思うの古語)から出たもので、この花を見ていると人を想うようになるから、という説もあるようです。

- 特集「魅力あふれる「まち」づくり」…… p1
- らしっくキャンパス／らしっくコラム …… p4
- プラザ通信 …… p5
- らしっく情報の森 …… p9
- ひろしま八区イベントガイド …… p11

## 魅力あふれる「まち」づくり



宇品を観光の基点に育て  
観光客が楽しめる広島のみちづくりへ●NPO法人まちづくりコミュニティデザイン研究所  
女子サッカーチームが始動！

スポーツと文化で、横川に人を集める●NPO法人広島横川スポーツ・カルチャークラブ  
気負わず楽しめる仕掛けづくりでアートをもちと身近な存在にしたい●NPO法人アートプラットフォームG  
らしっくキャンパス●安地区まちづくりプランプロジェクト「おとなりさん」  
地方都市のみちづくり●県立広島大学経営情報学部経営学科 准教授 栗島 浩二

# 魅力あふれる「まちづくり」

訪れる人が楽しく、暮らす人が心豊かに過ごせる、ワクワクするようなまちを目指していくつもの団体が活躍しています。今回は魅力的なまちづくりにアイデアを凝らす、「まちなか」の活動を紹介します。

## 宇品を観光の基点に育て 観光客が楽しめる広島のまちづくりへ

### NPO法人 まちづくりコミュニティデザイン研究所

<http://sankai-sta.jp/>

#### 宇品港に物産館がオープン

2011年12月、宇品港の旧ターミナルビルに、レストランを併設した観光物産館「山海ステーション」がオープン。NPO法人まちづくりコミュニティデザイン研究所が、3000アイテムを取り扱っている。

▲スタッフと、商品の確認をする理事長の寺西さん(右)。取り扱う商品が毎日のように増えていく。

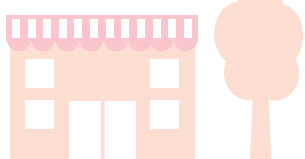


ます。取り扱い品目は日々増えていて、目標は300社。まだ周知がされていないものの、地元の人が目頃使うものを買ったり土産を求めに来たり、訪問者は徐々に増えています。「広島のものなら何でも手に入る」ところにしたい。地元の人に喜んでもらおうと同時に、観光客が必ず立ち寄る、観光の基点となることを目指しています」と理事長の寺西浩一さん。

県内各地域の観光パンフレットやイベント情報などが分かる情報センターも設置しています。

#### 豊かな観光資源を生かす

広島県は、豊かな自然、歴史、文化、四季折々の産物などが溢れています。広島へ観光に訪れる人は年間550万人。そのうち市内に



▲今はフリー客が多いが、いずれは県外から訪れる観光客のコース入りを目指す。

1100万人が訪れるといえます。しかし広島都市圏には、観光バスが横付けできて、買い物ができる、地域の味覚を楽しむ飲食ができる施設は皆無という悪い状態でした。「修学旅行生は、平和公園にバスを止め、団体でどこへ食事に行ったらいいのでしょうか?」そこで寺西さんと仲間が集まり議論をしたのがはじまりでした。

着目したのは「宇品」です。宇品は海の玄関で、路面電車もあり、広い公園もあり、立地には恵まれています。しかし、人が集まる仕組みはできていなかったと言えるでしょう。寺西さんは「観光客が集まるようになれば、観光船やチャーター便などができると思うのです。宇品港から宮島にフリー便が就航する可能性だってあるし、瀬戸内海の遊覧ができるかもしれない」と、宇品港の変身に期待しています。

#### 団結すれば、実現する

目指しているのは、単なる店づくりではありません。活気ある広島

のまちづくりです。そのためには、みんなで気持ちをひとつにして取り組みたいと、あらゆる方面にアプローチしました。広島県、各市町、観光連盟、地域の商工会、商店組合、漁業や農業の組合、市や町の議員にも会いにきました。「Facebookやメール、手紙などでは協力は得られません。とにかく直接会って、思いをぶつけました」。県内23市町へ全て回ったと言います。

現在、手づくり作品を制作している作家やサークルなどに働きかけ、展示・販売を進めています。また、物産館の上にある会議室を利用して、公民館やNPOなどの連携により、修学旅行生向けの平和体験学習や工芸体験といったワークショップなども実施していきたいと思っています。

「みんなのまちです。みんなで成功したいんです。思いをひとつにすれば、思いもよらなかったことが実現するんです」と、寺西さん。広島を思う気持ちが伝わってきました。



▲県内各地の観光情報やイベント情報が手に入るコーナーも設置。

#### 女子サッカーチーム発足

NPO法人広島横川スポーツ・カルチャークラブは、横川を基点にして広島市とその周辺地域を、スポーツや文化活動を通じて活性化させる活動をしています。

中でも、現在最も力を入れているプロジェクトが、なでしこリーグ参

戦を目指す、広島初の女子サッカーチームの運営です。チームの名前は「アンジュヴィオレ広島」。チーム設立に向けて、本格的に活動を開始したのは2011年4月でしたが、ワールドカップの優勝で一気に勢いづき9月にチーム発足。11月と1月には選手の実地大会を実施し、約20人の契約が決まりました。4月15日に開幕する県リーグでのデビューが決まっています。

地域密着のチームとするため選手は、中国地方の出身者または縁のある人で編成されています。「近所のお姉ちゃんが活躍するのをテレビで見ている、といったような地域との結びつきが強い関係をつくってきたい」と、事務局長の西村正さん。

#### 3つの柱で横川を元気に

広島横川スポーツ・カルチャークラブは、スポーツ・文化芸術の3つの柱

▲横川シネマで実施した、Jリーグサンフレッチェ広島戦のパブリックビューイング。



▲小学生の女子を対象にしたサッカー教室。女子サッカー人口を増やし、底辺強化をねらう。



#### 結束が強い地域活動

活動には、地元の複数の商店街、

## 女子サッカーチームが始動! スポーツと文化で、横川に人を集める

### NPO法人 広島横川スポーツ・カルチャークラブ

<http://www.facebook.com/HYSCC>

が深まり、いろいろなプロジェクトが生まれ、連携していきました。実は、事務局長を務める西村さんは、横川の住人ではありません。「昔、仕事で横川に関わって、横川の魅力に魅せられてしまいました。企業も商店も住人も一緒になって、まちを元気にしようという姿勢に惹かれたのです」。これも、横川のまちづくり活動の成果と言えるかも知れません。



▲アンジュヴィオレ広島の選手選考会。姉妹で参加した社会人サッカーの選手もいた。

## 子どもたちに安心できる遊び場を

今回のらっくキャンパスでは、大学生が中心となって運営しているボランティアサークル「おとなりさん」に取材に行かせていただき、代表の新田さんにお話を伺ってきました。

「子どもたちの放課後の居場所をつくりたい。」子どもが好んで集まった大学生74人が運営するボランティアサークル「おとなりさん」は、安公民館を拠点に子どもたちの遊び場づくりのための活動をしています。活動内容は、公民館に集まった子どもと一緒に遊んだり、宿題を見てあげたりなどさまざま。平日の15時から17時の活動に加え、休日には料理体験や体を動かすゲームなど、普段はできないようなイベントを開催しています。

「おとなりさん」が行う活動やイベントは学生が一から企画。イベントで使うゲームも学生が考え、手作りしています。「どうしたら子どもたちに喜んでもらえるか？」イベント前のミーティングでは、それぞれの思いが衝突することもあり、なかなか案がまとまらないそうです。それだけでなく、子どもたちへの対応や公民館との交渉も学生自身で考えて行動しなければならないので、

安地区まちづくり  
プランプロジェクト  
「おとなりさん」  
代表 新田佳代  
(にった かよ) さん



大変なことも多いのだとか。それでも悩んで苦労した分、子どもたちの喜ぶ姿が励みになるといいます。「おとなりさん」に来てよかった! その(手づくり)ゲーム欲しい! という子どもたちの言葉がすごくうれしいんです。」と楽しそうに語ってくれました。また、メンバー同士のつながりはもちろん、周囲からの支えも原動力になっているそうです。子どもたちが遊ぶおもちゃを提供してくださるOB・OGや、メンバーの相談に乗ってくださる公民館のかたがた。多くの人の温かい思いが、安心して子どもたちが遊べる場を支えています。

今年創設10周年を迎える「おとなりさん」。子どもの安全を脅かす事件が起きている今の時代だからこそ、子どもたちが安心して遊べる居場所づくりが大切だと感じました。これからも多くの子どもたちの笑顔をつくってほしいです。

スタッフ皆さんの子どもたちへの熱い思いが「人は支え合いながら生きている」ということを私に教えてくれました。

レポーター 広島大学 木村友美さん

## 第11回 らっくコラム

こちらのコーナーでは、市民活動、ボランティアについて研究されている大学の先生に「まちづくり」についてお聞きしています。市民主体のまちづくりや生涯学習について、ご自身の研究内容や体験などをふまえ、さまざまな視点からお話いただきます。

## 地方都市のまちづくり

私は流通やマーケティングを研究しています。マーケティングというと、「売るための技法」と考えるかたも多いのですが、本来は「顧客を創造するために、顧客満足を提供するプロセス」を研究する分野です。一方、大学の地域連携という観点から、地域ブランドの育成や観光振興、商店街の活性化事業等にも参加しています。

さて、地域連携の仕事に携わっていると、「まちづくり」ということばをよく耳にします。「まちづくり」とは、自治体や民間事業者が主体的に取り組み、環境に配慮した地域住民が暮らしやすいまちを創っていくという考え方のことです。しかし、「高齢化」が大きな課題となっています。高齢化の問題は中山間地域や島しょ地域だけでなく、地方都市においても重大な課題です。郊外ショッピングセンターが増加し、中心市街地の商店街はシャッ

ター通りと呼ばれるようになりました。また、高度経済成長期に「ニュータウン」と呼ばれた団地は今や「オールドタウン」と呼ばれています。自動車を持たない高齢者にとって、あるいは身体的に移動が難しい高齢者にとって、地方都市は決して住みやすい環境とは言えなくなりつつあるのです。さらに、人と人とのつながりが、比較的薄い都市部においては、まちづくりのコミュニティを形成するのは一層難しい問題です。

昨年の東日本大震災の映像をみて、経済振興や効率化だけを重視したまちづくりの考え方を見直す時期が来ていると感じました。そこで暮らす地域住民、主体者としての地域こそが「顧客」であり、そこに満足を提供するプロセスこそまちづくりに必要なマーケティングであると痛感し、今後も隠れた顧客満足を発見したいと考えています。

栗島 浩二 あわしま こうじ

■所属・役職 県立広島大学経営情報学部  
経営学科 准教授  
広島地域連携センター長

■活動概要 マーケティング、流通、営業  
(商店街の活性化事業、地域ブランド  
育成、観光産業振興 他)



暮らしの中にアートを  
市内中心部のランドマークともいえる、タワーマンションの敷地内に建つギャラリーG。運営しているのが、NPO法人アートプラットホームGです。ギャラリーは当初、企業のメセナ活動の一環として運営されていましたが、企業が倒産。ギャラリー撤退を避けるため、関わりがあった画家や大学教授、画廊経営者などで、団体を立ち上げました。目的は、ギャラリーの運営を柱に、市民生活にアートを根付かせること。テーマをライフ&アートと捉え、ア

「市民」「まち」と密接に  
広島のまちじゅうをアートで  
トが生活の一部になるような社会の構築をイメージしています。メインのプロジェクトに、食とアートを楽しむ「アート&イー」があります。まち歩きをしながらギャラリーや建築物を見て回り、テーマに沿った食事をして、カフェで食事をしながら作家や学芸員のトークショーをしたり、ワークショップと食事を組み合わせたり、時には音楽とのコラボレーションもあります。

いつばいにしようと、新しいプロジェクトも次々に生まれています。平和公園近くのビルを2カ月間、借り切って行った「ひろしまアートパークかみやちょう」。アーティストの制作過程を見たり、作品の即売会やワークショップ、グッズ販売などの多彩なプログラムで好評を博しました。広島市の委託事業として旧日本銀行広島

## 気負わず楽しめる仕掛けづくりで アートをもっと身近な存在にしたい

### NPO法人 アートプラットホームG

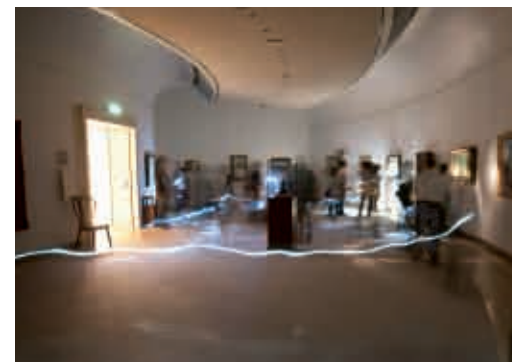
ギャラリーG <http://www.gallery-g.jp/>  
アートライフサポート <http://www.artlifesupport.com/>

今、アートにできること  
アートは生活必需品ではありませんが、社会の中での存在は決して小さくありません。理事の木村成代さんは、アートを通じて社会に問題を投げかけていきたいと考えています。「東日本大震災や原発の問題は、まだまだ解決していません。芸術は、社会の問題に対して役に立たない、余計なことだと思われることも多いですが、アートを通して現実に向き合うことや、解決の糸口やヒントが見つかること、気持ちが癒されたり勇気が生まれたりすることも事実です。また、人類の歴史上、天災、圧政など厳しい時代には、新しい芸術文化が生まれます。渦中にいるときは分かりませんが、今こそ、アートに関わる人は精力的に活動すべきだと思っています」。木村さんからは、アートの持つ力と可能性を感じました。



「ひろしまアートパークかみやちょう」で、新聞紙を使ったエコバッグをつくる「ナ」。

「ギャラリーGは、通りに面した全面がガラス張りの、開放感あるギャラリーだ。」



「夜の美術館でのイベント。懐中電灯で照らして絵を見ると、絵の具の盛りや筆跡がよく見える。」

村成代さんは、アートを通じて社会に問題を投げかけていきたいと考えています。「東日本大震災や原発の問題は、まだまだ解決していません。芸術は、社会の問題に対して役に立たない、余計なことだと思われることも多いですが、アートを通して現実に向き合うことや、解決の糸口やヒントが見つかること、気持ちが癒されたり勇気が生まれたりすることも事実です。また、人類の歴史上、天災、圧政など厳しい時代には、新しい芸術文化が生まれます。渦中にいるときは分かりませんが、今こそ、アートに関わる人は精力的に活動すべきだと思っています」。木村さんからは、アートの持つ力と可能性を感じました。